

「国際日本学」方法論構築をめざして

NAKANO, Hideo / 中野, 栄夫

(出版者 / Publisher)

法政大学国際日本学研究所

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

INTERNATIONAL JAPANESE STUDIES / 国際日本学

(巻 / Volume)

1

(開始ページ / Start Page)

5

(終了ページ / End Page)

45

(発行年 / Year)

2003-10-31

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00022550>

「国際日本学」方法論構築をめざして

中野 栄夫

はじめに ー日本学への関心ー

私が従来の日本史について多少なりとも疑問を持ち、漠然としてではあるが、「日本学」に関心を寄せるに至ったのには、つぎのような経緯もある。

私の勤務している法政大学には通信教育課程があるが、私は毎年必ずといってよいくらいに、通信教育の夏スクーリングと冬スクーリングで講義を担当してきた。というのも通信教育で講義をするのが楽しみでもあったからである。その大きな要因は、通信教育課程の授業での反応が通学課程生の場合とはおおいに異なっているからである。

人それぞれには、その人固有の歴史というものがある。通学課程生の場合でも生まれてから現在までの家庭や周囲の環境は人により異なっているので、個人差は大きいものである。しかし年齢・学歴はほぼ同じであり、全員が同世代といえる。ところが通信教育課程生の場合、その年齢差は激しく、したがって今までの人生経験も千差万別で、その多様性は通学課程生の場合と比較にならないほどである。私などよりずっと年長の方もおられるわけで、確とした人生観を持っている方も多いうように思われる。大学の講義であるので教員と学生という関係が当然形成されるわけであるが、社会人对社会人という関係が捨て去られるわけではない。ざっくばらんにいえば、酒を酌み交わされる仲である。そういった方々の前で講義をする楽しみ、これは格別である。

そして、スクーリングの際には、私は必ずといってよいほど「歴史のどこに興味がありますか」あるいは「歴史というものをどう思いますか」というタイトルでアンケートを書いてもらうことにしてきた。多様な経験を経た通信教育

課程生のレポートは、いろいろなことを私に語りかけてくれる。それを読むことは、大きな楽しみなのであった。そんなことを重ねているうちに、それまで書いていただいたレポートを、私だけが読むのではもったいないという気がしてきた。そのようになったのは、私自身のそのころ数年来の経験が作用したものと思われるが、それはともかく、何らかの形でこれを読む喜びを大勢で共有したいと考え、冊子をつくることとした。その中に、「歴史を学ぼうと思った動機について」と題するつぎのような文章を寄せてくれた学生（K， Yさん）がいた。

私が歴史を学びたいと思った理由は大きく分けて2つあります。その1つはアメリカの短大へ2年間留学した経験を通してです。母校でもあるその短大には日本語と日本の歴史のクラスがありました。私はそこで純粋な日本人という理由で日本語や日本事情（歴史を含む）についてスピーチをしたことがあります。また、近くの私立小学校から日本の文化や歴史を子供たちに紹介して欲しいという依頼を受けたこともあります。ここで私が言いたいことは、現在は大学の史学科で日本の歴史を学んでいる私のような学生でも、海外（国際舞台）へ出ると突如、自国の歴史の先生に仕立て上げられることもあるということです。そして、このようなことは私に限らず国際化と共に千差万別に誰のところにも起こり得る事実だと思うのです。

私はアメリカ滞在中、自分が日本の歴史を経て生まれて来た日本人であること、文化的・歴史的・思想的にも日本人なんだということを強く意識させられ、今に至っています。日本の歴史もよく認識していない私に日本人としての信念や誇りを持てるはずがありません。こんなことでは近い将来、再度渡米した際、大変なことになると焦りを感じたわけです。

2つ目は、現在は国際結婚をし二児の母になりましたが、この子どもたちが将来、日本人とアメリカ人（100% アイルランド系）の間で生まれたダブル（日本ではハーフと呼ばれていますが）と自覚した時、3つの国、日本・アメリカ・アイルランドの歴史について深く関心を抱くに違いありません。その時日本の歴史については私が担当し先生にさせられるのです。アイルランドの歴史は夫に任せるにしても、アメリカの歴史についても、

せめて夫の助手になれるくらいの知識は持ち合わせていたいと思ったからです。(実は来月17日3年の予定で渡米することになっています。)

(中野栄夫編『新・歴史とはなんぞや No.2』1997)

ここでいっていることはきわめて明瞭である。つまるところは、国際化の時代には自分の国のことをよく知る必要があるということであろう。このような文章は他にもいくつかあった。それを読んで、私も「国際社会に通用する日本史」が必要とあらためて感じた次第である。

そんな折りであった、法政大学で第二部改革を進めようという話が出たのは。私はすぐに「日本学」構想に飛びついたが、その背景には、このような経験が大きく作用していたはずである。

本稿では、国際日本学の構築にあたっての私の意図を、まとめておきたい。

1 国際日本学の構想

昨年度、私が拠点リーダーとして文部科学省に提出した日本発信の国際日本学の構築構想における「国際日本学」研究の基本的姿勢は、「異文化研究としての日本学」の構築と、「日本文化の国際性」の解明とであった。

前者の「異文化研究としての日本学」とは、つぎのようなことを意図していた。諸外国で展開された日本学は「異文化」研究としてのものである。それは、自国の歴史・文化を見ようとする「同文化」的視野とは当然異なったものである。ここでは、今まで「同文化」として研究されてきたものを、あえて「異文化」視する視点を導入することによって、新たな「国際日本学」を構築しようとしたものであった。すなわち、日本に関する諸問題を既定のもの、確定されたものとして扱うのではなく、絶えず「異文化」と見て対象化し、研究考察することである。またそういう形で国際社会に通用する新しい「国際日本学」を樹立したいと考えた。また、「日本の文化」を所与のものとして、単一のものとして見るのではなく、「日本の中の異文化」という視点から、もう一度、蝦夷・アイヌ、琉球・沖縄の問題を捉えなおしてみたい。そうすることによって、初めて日本の社会とその文化遺産とを国際的視野に立ちつつ研究することが可能となると考えた。

つぎに後者の「日本文化の国際性」であるが、その国際性として、以下の四つの柱を提起し、それにもとづいて研究計画を立案した。

- ① 視点の国際性：自国の歴史・文化を「異文化」視する国際的な視点を導入する。
- ② 文化の国際性：異文化交流のもとで形成された日本文化の多様性・重層性に着目する。
- ③ 研究組織の国際性：現地調査を含む共同研究のため、国際チームを組織する。
- ④ 教育の国際性：研究成果を教育に活かし、国際社会で通用する創造的人材養成を目指す。

上記の内の①視点の国際性は、国際日本学研究所において主として情報の共有化という観点から「日本学の総合的研究」を進めている。本構想では、この研究によって得られた情報をもとに②文化の国際性～④教育の国際性について展開を図ろうとしている。こういった構想のもとで、海外研究者との共同研究を進める。西欧との関係では、特に鎖国体制の中にあっても長崎出島を窓口として日本と交流のあったオランダと本学創設期に尽力したボアソナードの母国フランス、および本学と学術交流が深いドイツ・ロシアの4カ国を主な対象国としたい。アジアでは、東アジアの中の日本という観点から特に中国と韓国との関係を重視しつつ取り組みたいと考えた。英語圏は最初から無視したのではないが、意図的にはずした。日本の文化に関しては、蝦夷・アイヌ、琉球・沖縄に関して、「ヤマト」にスタンスを置いた視点ではなく、「日本の中の異文化」という視点から、蝦夷・アイヌ、琉球・沖縄にコンパスの軸を据えて⁽¹⁾、異文化間の文化の伝播、相互作用について考察していく。蝦夷・アイヌについて

(1) コンパスの軸を置くという考え方は、森浩一『地域学のすすめ－考古学からの提言－』（岩波新書、2002）による。氏はつぎのように定義している。「地方史は、都を中央と考えての地方史である。それにたいして、地域史というのは、都の存在や役割を重視するけれども、それぞれの地域にコンパスの軸をどっしりと置いて地域のことを考えようというのである。それぞれの地域にコンパスの軸を置くというのは、それぞれの土地をしっかりと見つめようとする姿勢をいう・・・」。(同書17ページ)

は、研究の蓄積が浅いので、共同研究機関との連携の構築を計画したが、さいわい蝦夷研究会のメンバーの協力も得られ、2003年8月には、陸前高田市においてシンポジウムを開催することができ、今後の研究に展望が開けた。また、「日本発信の国際日本学の構築」教育計画としては「国際日本学インスティテュート」を策定し、2003年度より大学院（修士課程）で展開されており、来年度は博士後期課程（博士課程）の学生募集も決まっている。

さて、意図は上記のようであったが、昨年度は準備期間としてこれらの課題に応えようと、様々な研究会を持った。月例会を除外すると表1のごとくである。

さて、2002年12月初旬の国際シンポジウムは、多数の外国人研究者も迎え、文字通り、本企画の出発となった記念すべき会であった。準備が遅れ、宣伝の時間もなかったため、参加者はそれほど多くはなかったが、期待通りの成果は得られたものと理解している。そのシンポジウムを通じて、私が感じ取ったのは、次のようなことであった。

まず第一に、われわれが研究対象とすべき「日本」とは何なのか、また、われわれが構築すべき「国際日本学」とは何なのか、このことを痛切に感じた。そして第二に、われわれが展開することのできる「国際日本学」とはいかなるものであるか、ということ強く感じざるを得なかった。その思いから、1月初旬から法政大学で研究を進めてくださったヨーゼフ・クライナー氏を中心にワークショップを持つにいたった。したがって、そこでのテーマが、「日本学をめぐる」・「国際日本学の方法 - 日本とは何か、日本学とは何か -」・「ヨーロッパの日本学・日本研究の現状」というようなものとなったのは必然であった（表1参照）。

2月のワークショップで、とくに学んだのは、ヨーゼフ・クライナー氏の、「メタサイエンスとしての国際日本学」という定義であった。ここでいう「メタサイエンス」とはクライナー氏の言葉通りにいえば、「学問の学問」ということである。クライナー氏は、関西のある研究機関に在籍している研究者から、「なぜ今、法政で日本学なのか」と尋ねられたとき、「法政のやろうとしているのはメタサイエンス（学問の学問）である」と明快に答えられたとのことである。

この「メタサイエンス」という言葉はともかく、「学問の学問」として日本

表1. 2002年度研究会

年 月 日	研 究 会 名	タ イ ト ル	主たる参加者
2002年11月14日	文部科学省平成14年度 COEプログラム 「日本発信の国際日本学 の構築」プレ記念 シンポジウム	アジアの中の日本 － 中国人から見た日本－	清成忠男 足立原貫 王敏 黄星原 中野栄夫
2002年12月6 ～8日	国際日本学研究センター・ 国際日本学研究所・国際 日本学インスティテュート 開設記念国際シンポジウム	21世紀COEプログラム採択 国際日本学の構築 － 日本発信の国際日本学の 構築－	樺山紘一 ヨーゼフ・クライナー 足立原貫 崔相龍 他
2002年12月13日	国際日本学シンポジウム ポストフォーラム	世界の中の日本 －ロシア人の見た日本－	コンスタンチン・サルキソフ ワディム・クリモフ タチアナ・マトルソワ エフゲニー・バクシエフ イリナ・レベジェバ 中野栄夫
2003年2月5日	第1回法政大学国際日本 学研究所ワークショップ	日本学をめぐるって	ヨーゼフ・クライナー 熊倉功夫 住谷一彦 王敏 中野栄夫
2003年2月7日	第2回法政大学国際日本 学研究所ワークショップ	国際日本学の方法 －日本とは何か、日本学とは 何か－	ヨーゼフ・クライナー 足立原貫 清成忠男 樺山紘一 住谷一彦 王敏 中野栄夫
2003年2月10日	第3回法政大学国際日本 学研究所ワークショップ	第1部 ヨーロッパの日本学 ・日本研究の現状 第2部 日本研究と博物館 ・コレクションの調査	ヨーゼフ・クライナー 中野栄夫
2003年2月14日	第4回法政大学国際日本 学研究所ワークショップ	日・ロ文化交流のあしどり	コンスタンチン・サルキソフ チュネル・タクサミ アンドレイ・クラフツェービチ 米家志乃布 佐々木史郎 中野栄夫

学研究を進めてきたのが、国際日本学研究センター顧問の足立原貫氏であり、同氏と研究会活動をしてきた法政大学総長・清成忠男氏である。奇しくもその方向は一致していたのである。

「学問の学問」ということは、清成氏から聴いていた定義であり、また研究会で足立原貫氏が述べていたことでもあった。それと同じことをヨーゼフ・クライナー氏から聴いたのであるが、そのときの私には、それをまだ良くは理解し得ていなかったように思う。それがよくわかるようになったのは、海外調査を通じてのことであった。すなわち2月から3月にかけて、ヨーロッパ（フランス・ドイツ・オランダ）、中国（北京）の日本学関係研究機関への訪問を経たことである。外国のいくつかの日本学関係研究機関をまわって如実に感じたのは、つぎのようなことであった。

われわれの組織以前に、日本には国立の研究機関である国立歴史民俗学博物館・国立民族学博物館・国際日本文化研究センターなどがある。そういった研究機関から調査にきたといった話は、どこへ行っても必ず聞かされることであった。そういった国立の研究機関に比して、立ち上がったばかりのわれわれは大きく立ち後れているし、また、スタッフ・施設・予算の面からみても正面から立ち向かえるものではない。ただ、唯一の利点は東京のしかも真ん中に位置しているということぐらいであろう。それを活かしながら、先行する研究機関とは違ったものを目ざさねばならない。そのように気がついたときに、これだ、と気づいたのが「メタサイエンス（学問の学問）としての国際日本学」ということであった。これは調書を書く段階から考えていたことではあったが、まだ言葉だけのものであり、その真の意味はわかっていなかったのだということも、そのときに気づいたのであった。

ここで、「メタサイエンス（学問の学問）」と語っているのは、わかりやすくいえば、外国人が「日本」・「日本人」をどのようにみているかを研究することである。足立原氏の言葉を借りれば、「外国人が日本をどのように見ているかを研究しよう」ということである。自分が他人からどのようにみられているか、ということは、誰でも感心を持つことであり、足立原氏も外国人が日本をどのようにみているか、ということに関心を持ち、「日本学研究」を始めたというのである。しかし、「メタサイエンス（学問の学問）としての日本学」と

ということでは、今まで足立原貫氏などが行ってきた「日本学研究」と異なることがない。私たちの目ざすのは「メタサイエンス（学問の学問）としての国際日本学」である。どこかに違いがなければならぬ。

ここでわれわれが試みようとしているのは、外国人が「日本」をどのようにみているかを、日本文化を体現している日本人のみが評価するのではなく、第三者的な国（民族）の人に見ていただく、ということである。たとえば、現在、「中国における日本研究の新しい流れ（仮題）」という論集を編集中であるが、「中国人が見た日本」を、中国人でも日本人でもない人に読んでいただいて評価してもらおうというねらいを含んでいる。これが「メタサイエンス（学問の学問）としての国際日本学」の試みの一端である。つまり、「メタサイエンス（学問の学問）としての国際日本学」とは、日本の評価をわれわれと複数の外国の研究者とで、共同で行おうということである。これによって、国際日本学の構築が可能となろう。

もちろん、「日本学」と銘打つ以上、「日本」ないし「日本人」の独自の研究も進めねばならない。しかし、「国際日本学」である以上、その際にも外国人の見方、すなわち「外国人の目」を借りようというねらいである。

われわれが不思議とは感じないが、外国人からみれば異様としか見られない例の一つあげておこう。最近発表された佐々木隆氏『明治怪猫伝』（『日本歴史』664、2003）には、猫の断尾についての外国人の勘違いについて述べている（以下、引用も同論考より）。

猫のしっぽを短く切ってしまう断尾は、飼い猫の「猫又化」を防ぐためのものという。猫又とは、年を経た古猫の尾が二つに割れてさまざまな神通力を得たものであり、二脚で立ち上がり人語を解し、巨大化して人を喰うという。それを防ぐために断尾を行ったものであるという。

ところが、幕末から明治初期に来日した西洋人の中には断尾された猫を見て生来のものと勘違いするものが少なくなく、かのアーネスト・サトウも日本旅行ガイドブック『明治日本旅行案内 上巻』につきぎのように書いているという。

日本の猫の尾の椎骨はとて少なくて多かれ少なかれ退化して歪み、そのために基部を残すのみとなっていてささか変形してしまったのである。日本周辺の大連の猫が同様に尾が短いかどうか確かめるのは大変興味深いことで

ある。

また、1865年（慶応元年）に来日した、トロイ遺跡の発掘者ハインリッヒ・シュリーマンは、つぎのように書いているという（『シュリーマン旅行記 清国・日本』）。

世界の他の地域と好対照を何一つ書きもらすまいと思っている私としては、次のことは言わなくてはならない。すなわち日本の猫の尻尾は一センチあるかないかである。

最近は断尾を行うことは少なくなっているようであるが、私の幼いころは当然のこととして断尾を行っていた。ただし、その理由を、猫のしっぽは不潔であること、しっぽを切った方がよくネズミをとるから、といったものと解していた。しかし、それが人為的になされたものであることは、誰もが知っていたことであるが、その風習を知らない外国人の目には生来のものであると映ってしまったのである。佐々木氏によれば、これには、断尾を迷信扱いされるのを嫌ったのか、邦人も彼らに正確な説明を与えなかったようである、という事情もあったようであるが。

外国人の研究者に正しい理解をしてもらうには、正しい情報と説明とを提供しなければならない、それ抜きだと誤解を招く、というよい例と思うが、外国人に猫又伝説を話したら、その外国人は猫又伝説を研究したかもしれない、などと思ったりもした。それはともかく、外国人に正しい情報を提供し、また正しく説明できるよう、「日本」に関する研究を深めて行かねばならない。

2 日本・日本語・日本人

(1) 日本とは

「日本学」というとき、まず何よりも先に問題となるのが、「日本」とは何かという点であろう。「日本」を明確に定義することなしに、「日本学」を語ることは無謀であると私は理解している。

この点につき、明瞭に述べているのが、網野善彦氏であろう。網野氏は『「日本」とは何か』（講談社版『日本の歴史』第00巻、2000）でつぎのように述べている。

ここで再三のくり返しになるが、あらためて強調しておきたいのは、「日本人」という語は日本国の国制の下にある人間集団をさす言葉であり、この言葉の意味はそれ以上でも以下でもないということである。「日本」が地名ではなく、特定の時点で、特定の意味をこめて、特定の人々の定めた国家の名前－国号である以上、これは当然のことと私は考える。それゆえ、日本国の成立・出現以前には、日本も日本人も存在せず、その国制の外にある人々は日本人ではない。「聖徳太子」とのちによばれた厩戸皇子は「倭人」であり、日本人ではないのであり、日本国成立当初、東北中北部の人々、南九州人は日本人ではない。(同書、87ページ)

近代の人にとっても同様である。江戸時代までは日本人でなかったアイヌ・琉球人は、明治政府によって強制的に日本人にされ、植民地になってからの台湾では台湾人、朝鮮半島では朝鮮人が、日本人となることを権力によって強要されたのである。

網野氏のこの指摘は「日本」という呼称についての吉田孝氏の指摘を受けたものであるが(吉田孝『日本の誕生』岩波新書、1997)、私はこの指摘にまったく賛成である。「日本国成立」以前の呼称については、ここではさしあたりふれないこととするが、「日本国成立当初、東北中北部の人々、南九州人は日本人ではない」のであり、「江戸時代までは日本人でなかったアイヌ・琉球人は、明治政府によって強制的に日本人にされ、植民地になってからの台湾では台湾人、朝鮮半島では朝鮮人が、日本人となることを権力によって強要されたのである」。このことを抜きにしての「日本史」は真の日本史ではなく、ヤマトの歴史にしかすぎない。古代以来、少なくとも東北中北部、南九州さらにはアイヌ・琉球は、別の歴史を持っていたのである。

私がこのことを感じたのはさほど古いことではない。長い間、大学で日本史概説を講義してきたが、自分で説いている概説に片寄があることに気がついた、それはいわゆる「日本史」であって、真の日本の歴史にはなっていないのではないかということであった。10年ほど前にそのことに気がつき、その後は、東北地方の蝦夷関係史跡・施設を回ったり、沖縄の中世城郭(グスク)などをめぐり、講義の中で写真などで現地を紹介しつつ講義に取り入れてきた。その間に感じたことを一言でまとめてみるとつぎのようになろう。す

なわち、今までの「日本」研究はあまりにも「ヤマト」中心、稲作中心であったのではないか、ということである。これは、よく網野氏がご指摘されていることと同じものであった。

(2) 日本語とは

日本という場合、一つの考え方として、「日本語」が使われている範囲という考え方がある。一般に、日本はどこに行っても日本語が通じるという理解がなされているようであるが、それは本当であろうか。たとえば、朝日新聞2003年8月2日の「be on Saturday」版の「ことばの旅人」欄「ドーデ最後の授業」につぎのような記事が見られた。

私たちには、日本語を集団として奪われた記憶がない。逆に隣国の民に自分たちの言葉を強制した過去を持つ。

私はこの文章を見てあせんとした。ここでいう「私たち」がヤマトを指すのなら、きわめて自然な指摘ともいえないことはない。しかし、今の「日本」を構成する人びとは決して単一民族ではない。すでに指摘したように、明治までは日本に含まれていなかった琉球は沖縄として日本に包摂され、またアイヌの人びとも「旧土人」として日本に含まれた。そして、琉球（沖縄）の人は、琉球語ではなく「日本語」を強制され、またアイヌの人びとは、自分たちが話していたアイヌ語を取り上げられ、「日本語」を強制された。このように、琉球・アイヌの人びとは、自分たちの言葉を集団として奪われ、日本語を使うことを強制されたのである。琉球語を日本語とは別のものとするか否かについては見解の相違もあろうが、少なくとも、琉球はヤマトとは別の王権を樹立していたわけで、アイヌと同様、別の民族というべきと私は考えている。つまり、明治以前は、琉球もアイヌも別の民族であり、ヤマトとは別の存在であったといわなくてはならない。そのような歴史を顧みれば、朝日新聞の記事のようなことはとても書けようもないはずである。

さて、網野善彦氏は、司馬遼太郎氏との対談の中で、つぎのような事を述べている。少し長くなるが関係箇所を引用させていただく。

最近、文字の勉強をしまして非常に不思議なことにいくつか出くわしました。私はこれまであちこちの江戸時代の古文書を見る機会がありま

したが、何気なしにそれをずっと読んですましてきたんです。ところが、今ごろになって、だいたいどうして、九州の古文書と東北の古文書をぼくが読めるんだらうという疑問にぱったりとぶつかった。これはごく最近なんです。まことに不明なことなんですけれども。実際、四、五年前に鹿児島へ行ったときにも、バス停で立っている隣のおばさんたちの話が何もわからないんですね。ゲラゲラ笑っているんだけど、何を笑っているのか全くわからない。

そういう経験をいくつかしているうちに、ふと、なんで読めるんだらうという疑問にぶちあたったんです。そういう関心で見ていると、鎌倉時代でも読めるんですね。それは決して中央から行った武士の書いた文書ではなくて、土着の武士の文書で、ひらがなに漢字をまじえて書かれた古文書でも読めるわけです。日本人が均質だとよく言われますが、これは文字社会だけのことでインチキがあるんじゃないかという気がし始めましたね。

(司馬遼太郎『対談集 東と西』朝日新聞社、1990)

網野氏のこの発言を読むまで、私も何の疑問も持たなかったが、この発言はまことに重要な点をついていると思う。私たちは、「日本語」が画一的と考えがちであるが、それは、「日本語」教育の徹底と、マスコミのおかげである。言い換えれば、本来、「日本語」というものは、単一ではなく、北から南まで、さまざまな言葉が使われてきたのである。それを方言として、本来一つの言葉の地域的バリエーションと見る立場もあろうが、私は本来多様な言葉の寄せ集めと考えたい。網野氏のご指摘を受けて極論するならば、「文字」だけが共通語だっただけのことでないか、そのように感じるようになった。

「日本語」を話す範囲を「日本」と考える先学として柳田國男氏をあげることができよう。柳田氏はいうまでもなく、民話・方言という「日本語」の枠内での研究を進めてきた先学である。柳田氏は琉球語を日本語の一方言と見なし、沖縄を日本の一部、というより、日本の原点と見なした。その反面、アイヌ語は日本語の方言とは認めがたかったため、アイヌおよびアイヌ語は、柳田氏の世界からは除外されてしまった。別の表現でいえば、アイヌ・アイヌ語は非日本的なものとして切り捨てられてしまったのである。

柳田氏は、伊良湖岬で椰子の実が浜に流れ着くのを見て、沖縄を日本のふる

さとと見るようになったが、十三湊（青森県）の海岸に大陸からの漂流物が打ち寄せられているのを見ても、何の反応も見せていない（『雪国の春』〔『柳田國男全集2』〕）。柳田氏にとっては、そこは、元アイヌの地であり、「日本」ではないから、という理由によるものではないかと私には思えてならない。明治以降の政府はアイヌ切り捨て政策を行ってきたが、明治政府の高級官僚であった柳田氏もまた、それと同様な方途を選んだと、私は理解している。

（3）日本と日本人

さて、今まで述べてきたヤマトは、広義での意味とすべきであろう。

狭義のヤマトとは、古代王権が直接の勢力基盤とする範囲で、畿内を指すものと考えてよいであろう。その権力が支配を及ぼす範囲、それが広義のヤマトである。律令制成立段階でいえば、東北中部から九州中部付近までである。東北中部以北および南九州はヤマトの範囲外であったと考えられる。このヤマトが、従来考えられていた「日本」の基本をなす。それ以外は化外としてヤマトの範囲外、つまり「日本」ではない。東北部の地の人びとは、畿内の王権に属さない化外の民として蝦夷と呼ばれ、南九州の民は隼人と呼ばれていた（以上、吉田孝『日本の誕生』、網野善彦『日本とは何か』を参照）。

この「化内」と「化外」との境界を指す概念を、ブルース・バートン氏は「辺」と名付け、その上で、つぎのように述べている（ブルース・バートン著『日本の「境界」 前近代の国家・民族・文化』青木書店、2000）。

ここで注目したいのは、「辺」は、概念としても実質的にも境界線ではなく境界地域であった、という点である。概念としての「辺」は、現代でいう「フロンティア」とほぼ同じ意味であったことが指摘できる。そして律令国家の「辺」が実質的にもフロンティアであったことは、当該地域の個別検討によって確認できるのである。以下、(1)本州北東部にあったエミシとの境界、(2)南九州・南西諸島にあったハヤト・南島人との境界、(3)東シナ海・玄界灘などにあったアジア大陸との境界、の三つの境界について検討するとしよう。（同書32ページ）

バートン氏のいう「境界地域」概念は、こういった問題を考える上で有効であろう。

さて、この畿内を中心とする勢力が、基本的に使用し、支配のために文書上の共通語として使用されていた言語が「日本語」の基本であると考えてよいであろう。地方では、バリエーションある言語が長く使用されていたと考えられる。それらが方言と呼ばれているわけである。

私は今の「日本」を、便宜的に、ヤマト、蝦夷・アイヌ、琉球・沖縄、との3つに分けてみているが、それではその総体からなる「日本人」とは何か、先にもふれたが、それも網野善彦氏のつぎのような定義に従っておきたい。

ここで「日本人」というのは「日本国」の国制の下にある人びとで、それ以上でもそれ以下でもない。私は日本人という言葉はそのような意味で使うべきで、これにさまざまな意義を加えることは、問題を曖昧にすると考えている（網野善彦『日本とは何か』20ページ）。

以上、先学に導かれながら私なりにまとめてみた。

3 日本における日本学研究の足どり

昨年（2002年）12月の国際シンポジウムで私たちのプロジェクトをお知りになった島田昌彦氏から『日本学への道 世紀を越えて』（明治書院、2000）をいただいた。そこには、「『日本学』研究の歴史」と称する章があり、日本学研究の足どりを概観しているのので、ここでは、とりあえずそれを手引きとして、今までの日本学を整理し、われわれが目ざしている国際日本学との相違を明らかにしておきたいと思う。なお、島田氏は、江戸時代の国学についてもふれているが、ここでは明治以降の「日本学」を見ることとする。

まず、「日本学」という名称を掲げたのは、財団法人日本学研究所であろう。これは1939年に設立され、翌々年から『日本学研究』⁽²⁾を刊行している。島田氏は、

当時の日本を巡る国際環境の下での「日本学研究」の火急の必要が惻々として訴えられている。しかし、その実質は、次に掲げたようなもので、「大東亜新秩序ノ建設」とは、いかんともしがたく遠いものであることは、

(2) この『日本学研究』は、ぜひとも入手して検討したいと考えている。

否定できない。(同書11ページ)

との評価を与えている。なお、私はこれをまだ実見していないので、とりあえず、島田氏の評価を紹介するにとどめる。

島田氏は、つぎに大阪大学の日本学について言及している。阪大では、1974年に、前年に創設された文学部美学科に「日本学講座」が開設されるが、これを、島田氏は、

アメリカ、フランス、ドイツ、韓国などにおける日本研究を明証して「日本学」としているがそれらはいわゆる「東方趣味(オリエンタリズム)」を土台とした地域研究としての「日本研究(ジャパニスタディーズ)」であって、本書が追求する「日本学(ジャパノロジー)」ではない、(同書13ページ)

と位置づけている。はからずもここに、島田氏の立場が示されている。しかしこれは早くも翌1975年に廃され、大学院の「日本学専攻」に日本文化学講座と比較文化学講座が設置された。そして1986年に学部にも「日本学科」が新設されたが、10年後の1996年(平成7)の文学部人文学科創設に伴い、「日本学科」は廃止され、現在残っているのは文化形態論専攻の日本学講座のみである。参考までに、本年度の同講座の開講科目を示しておく(表2参照)。この講座は、本学で日本学インスティテュート開設の企画段階で参考にさせていただいたが、詳細な検討は後日を期すことにしたい。

島田氏がつぎにあげているのが、啓蒙雑誌『日本学』である。これは千葉県佐倉市に国立歴史民俗博物館が開設したのと歩調を合わせたものとみてよく、その創刊号・第2号には歴史博初代館長となった井上光貞氏等による鼎談「日本学への招待」が載せられている。これは、島田氏の表現によれば、

歴史博が抱える三学(歴史・民俗・考古)並存の視座から、その相互乗り入れによって「日本学」を想像しようとの方向性を語っている。

・・・啓蒙雑誌『日本学』は、もろもろの「日本文化研究」すなわち「ジャパン・スタディーズ」の提示で終始した。

ものである。参考までに、啓蒙雑誌『日本学』の総目次を本稿末に付しておいた。

さて、島田氏は、その後で、北京日本学研究センターをあげているが、これ

表2. 大阪大学大学院人文科学研究科文化形態論（日本学）専攻

授業科目名	講義題目	担当教官	単位	開講時期
日本文化学講義	近代日本の民俗と宗教	川村 邦光	2	2学期
日本文化学講義	古代日本列島における家族・親子・女と男	三浦 佑之	2	1学期
文化交流史講義	文明開化と国民化	植村 邦彦	2	1学期
文化人類学講義	伝承の中のメウモを読む	義江 明子	2	1学期
比較文化学講義	少子化時代の成立と家族	荻野 美穂	2	2学期
*日本学研究方法論演習	日本研究の現状と問題点	荻野美穂ほか	4	通年
*日本学研究方法論演習	日本研究の可能性	荻野美穂ほか	4	通年
文化人類学演習	文化人類学・民俗学の方法	川村 邦光	2	1学期
文化交流史演習	在日外国人の諸問題	杉原 達	2	1学期
文化交流史演習	沖縄近現代史研究の諸問題Ⅰ	富山 一郎	2	1学期
文化交流史演習	沖縄近現代史研究の諸問題Ⅱ	富山 一郎	2	2学期
日本文化学演習	民俗学と歴史学のあいだ	中村 生雄	2	2学期
日本文化学演習	1930年代の文化研究Ⅰ	川村 邦光	2	1学期
日本文化学演習	1930年代の文化研究Ⅱ	川村 邦光	2	2学期
文化交流史演習	文化交流史研究Ⅰ	杉原 達	2	1学期
文化交流史演習	文化交流史研究Ⅱ	杉原 達	2	2学期
文化交流史演習	歴史記述にかかわる理論的諸問題Ⅰ	富山 一郎	2	1学期
文化交流史演習	歴史記述にかかわる理論的諸問題Ⅱ	富山 一郎	2	2学期
比較文化学演習	身体における「自己」と「他者」を考えるⅠ	荻野 美穂	2	1学期
比較文化学演習	身体における「自己」と「他者」を考えるⅡ	荻野 美穂	2	2学期
日本学修士論文作成演習	日本学修士論文の作成Ⅰ	中村 生雄	2	1学期
日本学修士論文作成演習	日本学修士論文の作成Ⅱ	中村 生雄	2	2学期
日本学修士論文作成演習	日本学修士論文の作成Ⅰ	川村 邦光	2	1学期
日本学修士論文作成演習	日本学修士論文の作成Ⅱ	川村 邦光	2	2学期
日本学修士論文作成演習	日本学修士論文の作成Ⅰ	杉原 達	2	1学期
日本学修士論文作成演習	日本学修士論文の作成Ⅱ	杉原 達	2	2学期
日本学修士論文作成演習	日本学修士論文の作成Ⅰ	富山 一郎	2	1学期
日本学修士論文作成演習	日本学修士論文の作成Ⅱ	富山 一郎	2	2学期
日本学修士論文作成演習	日本学修士論文の作成Ⅰ	荻野 美穂	2	1学期
日本学修士論文作成演習	日本学修士論文の作成Ⅱ	荻野 美穂	2	2学期

については別の機会であふれることとしたい。そしてつぎに、梅原猛著『日本学事始』をあげ、

ここで言う「日本学」とは、従来の日本の学問があまりにも狭い専門領域と視点にとらわれたものであることを否定し、我が国の古代世界を対象とし、総合的、哲学的な新しい学問を提案したものである。・・・本書が追求する「日本学」研究の基盤となるものである。(同書21ページ)

と高い評価を与えている。ここにも鳥田氏の立脚点を伺うことができる。

なお、鳥田氏は最後に、「日本の美しい文化と伝統の発掘に献身した維新以降の在野の先陣の略歴と業績を集約することを目的に」編集されたシリーズ『民間日本学者』をあげているが、ここでは、その紹介にとどめるのみとしたい。

そして、鳥田昌彦氏ご自身は、ご自身の「日本学」をジャパNSTAディーズではなくジャパノロジーであると位置づけているが、つぎのように言及している。

本書で言う「日本学」とは、「日本文化論」とは立場を異にし、まず第一は、世界の中において、日本とは何であるか、日本の存在そのものを正面に据えて、自覚的に日本の価値を訴えようとするものであり、かつ、そのような日本の価値を確認することを通して、我々日本人が世界の中で自信を持って生きることを可能とするものである。(同書179ページ)

以上にみた「日本学」は、個人の視点および阪大の試みを別とすると、日本文化の美点を訴えるもの、あるいは細分化された専門分野の枠を乗り越えて、諸分野が協力して「日本の文化」を研究しようとするものであると位置づけられよう。その代表が啓蒙雑誌『日本学』であろう。しかし、同誌も20号で中断した。その理由としては、方法論の欠如があったと私は理解したい。単に諸分野の研究者が協力するだけでなく、そこに何か新しい息吹を吹き込まねばならないように、私は思う。その息吹とは、方法論であり、視座である。我々は、そんな中で、「異文化」視点を打ち出し、学問の方法として「メタサイエンス」を打ち出した。その点で、従来の「日本学」とは一線を画していると考える。なお、阪大の「日本学」は、上記の「日本学」とは若干異なっているように理解しているが、詳細についてここで言及することは避けたい。

現在、日本国内で「日本学」を看板にしているものとして、阪大の他、お茶

の水女子大学大学院の日本学専攻、立教大学の日本学研究所、金沢工業大学の日本学研究所、などがあげられよう。その評価については、今後詳細に検討して行く必要があるが、その内実は、啓蒙雑誌『日本学』の立場と同様、複数の専門領域から日本の研究を行おうとするものであり、「日本学」そのものをターゲットとして体系的に展開する試みはなされていないように思われる。しかし、そういった機関とも今後協力関係をめざしたいと思っている。

最後になったが、富山で足立原貫氏が主宰している「日本学研究会」「日本学研究所」にふれておきたい。足立原貫氏が主宰している日本学研究会は、「世界の人たちは、日本と日本人をどのように見ているでしょうか」（2003年度日本学研究会シンポジウムパンフレット）という立場をとっており、われわれの「メタサイエンス」と同じ立場といってよい。また、「資料の不備や偏った情報による、誤った日本観がつけられるのを避ける努力をすべきだ」（朝日新聞1993年4月16日富山版）との主張も見られる。ここでは、その活動の一端を紹介しておくが、詳細な紹介はいずれ機会を得て行いたい。

足立原氏主宰の日本学研究会は、表3のように1987年に設立され、毎年着実な活動を重ねている。その活動のありさまは、表から伺えるので、ここでは繰り返さないが、「草の根シンポジウム」を重ねていることから知れるごとく、「中央」の研究者を集めて行うというより、地道な活動に徹している。

法政大学では、今年6月20日付で、「国際日本学研究センター」および「国際日本学研究所」を商標登録したが、足立原貫氏も、今年5月18日付で「日本学研究所」を再商標登録されている。足立原氏は1990年に「国際日本学センター」の商標登録もされていたが、こちらについては、法政大学に譲っていただいたかたちになっている。それは、足立原氏が、私たちのプロジェクトにご理解を示していただいたからで、感謝の気持ちでいっぱいである。なお、別のところでふれているが、足立原氏は、われわれの法政大学国際日本学研究センターの顧問に就任していただいている。

このように、足立原氏の活動に啓発されること大であり、多くのことを学ばせていただいている。

表3. 「日本学研究会／日本学研究所」の歩み

年次	年 月 日	記 事
1	1987 昭和62年11月 1日	日本学研究会発足
2	1988 昭和63年 4月 1日	日本学資料1号発行
3	1989 平成元年 4月 1日	日本学資料2号発行
	10月 20日	中国社会科学院日本研究所(北京)における懇談会に足立原出講
	12月 14日	ユーロパリア・ジャパン'89フォーラムパラボックス・ジャパン (於:ベルギーブリュッセル)に足立原出講
4	1990 平成2年 4月 1日	日本学資料3号発行
	7月 30日	「国際日本学センター」商標登録
5	1991 平成3年 1月 29日	高増杰・中国社会科学院日本研究所高級研究員を富山に招請し 講演会
	3月 13日	中国社会科学院研究生院中日文化比較講座(於:北京)に足立原出講
	4月 1日	日本学資料4号発行
	9月 30日	「日本学研究所」商標登録
	11月 4日	国際森林シンポジウムで足立原基調講演「日本の草の根運動」 (於:張家界)
6	1992 平成4年 4月 1日	日本学資料5号発行
	11月 3日	武陵大学で足立原特講「日本の住民活動・環境保全の思想と実践」 (於:張家界)
7	1993 平成5年 4月 1日	日本学資料6号発行
	4月 17日	「日本学」'93草の根シンポジウム(於:富山)
8	1994 平成6年 4月 9日	「日本学」'94草の根シンポジウム(於:富山)
9	1995 平成7年 10月 7日	「日本学」'95草の根シンポジウム(於:北九州)
10	1996 平成8年12月号	韓国語誌『日本フォーラム31号』に足立原論文転載
11	1997 平成9年 10月 31日	中国湖南省の少数民族・土家族文化と日本文化の比較検討会 (於:張家界)
12	1998 平成10年 6月 24日	〃
13	1999 平成11年10月 29日	〃
14	2000 平成12年11月 1日	〃
15	2001 平成13年10月 31日	〃
16	2002 平成14年11月 4日	〃
17	2003 平成15年 4月 11日	「日本学研究所」商標再登録
	5月 18日	日本学研究会シンポジウム(於:富山)

4 いくつかの試み

ここでは、昨年来、「日本発信の国際日本学の構築」を推進するために、いくつかの事業を行ってきたが、私の意図、そして学んだことなどをまとめておきたい。

(1) 北方史研究の試み

先に、今までの「日本」研究はあまりにも「ヤマト」中心、稲作中心であったのではないか、ということを書いた。「日本」を構成するものとしては、「ヤマト」の他に、歴史的に見れば、蝦夷・アイヌ、琉球・沖縄の存在等がある。そして、それは今日でも、未解決の問題として残っている。この両者はたんに地域の問題として片づけられない問題を抱えている。そんなことに気づいた後は、東北地方の蝦夷関係史跡・施設を回ったりして、講義の中で写真などで現地を紹介しつつ講義に取り入れてきたことは、すでに指摘した。それについて少し述べたいと思う。

私が北方史について関心を寄せたのには、つぎのようなこととも関わっている。指導している大学院生が研究している下野（栃木県）地方の中世城館を、しばしばその院生と訪れるようになったが、下野地方の中世城館には、二重堀を有する城館が多いことであり、また、それが、その地方の一つの特色として指摘することができることがわかってきた。それを私は勝手に「えみし蝦夷」系の城郭と理解するようになった。というのは、南関東・西関東ではほとんど見られないからである。のちになって、あづかし厚樫山（阿津賀志山・福島県北部）麓に、奥州藤原氏が、源頼朝の進軍を迎え撃つために造った堀が二重堀であることを実見し、その思いはさらに強まるようになった。実際、北方史で取り上げられる城柵などは二重堀のものが多い。また、おりから学部生の卒論指導の一環として、岩手大学図書館所蔵文書を調査させていただき、さらに足をのばして、津軽曾我氏の史跡なども見て回った。そして津軽曾我氏関係文書を大学院で取り上げるようになり、ますます北方史に関する関心は深まっていった。なかでも、岩手大学図書館所蔵文書調査の行きがけに、水沢市立埋蔵文化財調査センターに立ち寄り、ビデオを見せていただいたが、

それが大きな価値観の転換であった。

水沢には、蝦夷対策として胆沢城が置かれたが、そもそも肥沃な地方で、蝦夷たちの一つの中心地域であったようである。ビデオは、蝦夷の指導者アテルイが同胞モレを率いて坂上田村麻呂を訪れ、今後は抵抗せずに律令政府に協力するという場面に進み、坂上田村麻呂に率いられて都に上るが、アテルイたちは坂上田村麻呂の助命嘆願にもかかわらず、律令政府によって処刑されてしまうところで終幕を迎えるが、「律令政府側では坂上田村麻呂は英雄としてたたえられるが、アテルイもまた蝦夷の英雄として蘇ってくる」といったナレーションが流れてビデオは終わる。これを見て、さすがに蝦夷の地水沢だけあって、田村麻呂を英雄としていないな、と感じるとともに、まさにこれこそ、蝦夷側にコンパスの軸を置いた見方である、と納得したのである。そんなことから、その後もしばしば東北地方に調査に向かうようになった。

そんな時、2000年の秋の初めに陸前高田市を訪れ、市立博物館学芸員の方から、文字を読んでいただけませんか、と小泉遺跡の出土土器を見せていただいた。そのとき、まずびっくりしたのは、狭い調査域からにじつに多量の墨書銘土器が発掘されたということであった。そして、その中に「厨」銘土器が含まれていることに、さらに驚いた。それを見てまず思いついたのは、郡衙ではないかということであった。そして、「気仙郡の郡衙はどこにおかれていたか判っているのですか」と尋ねた。「判っていない」という返事を聞いて、小泉遺跡は郡衙跡ではないかという私の思いは確信に変わり、「小泉遺跡は郡衙ではないのですか」との見解を述べた。そのことがひろまったのは、翌2001年夏に花巻市で開かれた古代史サマーセミナーで、「厨」銘墨書土器が参加者に紹介されてからである。同年9月になってそこに参加していた岩手日報から取材を受け、新聞でひろく知られるようになった。その後も小泉遺跡のことは頭から離れずにしばしば陸前高田を訪れるようになった。

その間に、蝦夷関係の研究を行っている研究者とも交流が深まり、蝦夷研究会にも出席するようになり、そして今回の陸前高田市におけるサテライトシンポジウム実現の運びとなったという次第である。

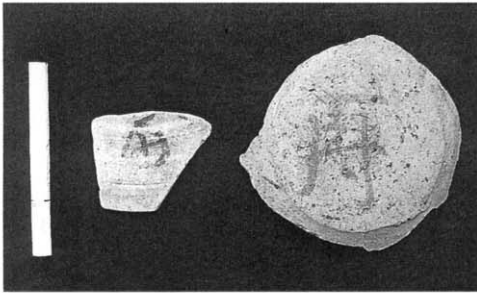
現在、大学院生の協力を得て、蝦夷関係文献目録を作成している。それを多くの人に見ていただいてより充実させるとともに、文献そのものを収集したい

小泉遺跡 高田 陸前 で 厨 土器が出土

県内初の郡衙か

陸前高田市教委が発掘調査した同市高田町小泉の遺跡から「厨」と墨書された土器が出していたことが分かった。厨房を指す「厨」土器の出土例は水沢市の胆沢城などを管衛・役所・遺跡には限られるほか、小泉遺跡周辺に平安時代の気仙郡の郡衙（律令制の郡役所）があった可能性が指摘されている。郡衙だとすれば県内初の事例となるだけに本格的な調査が期待される。

遺跡は市博物館の北東一帯。広田湾に注ぐ小泉川沿いの扇状地位置している。周知の遺跡ではなかったが一九八〇年の圃整備の際、墨書土器を含む土器群が出土した。調査報告は未刊行だが、このほか花巻市で開かれた古代史サマセミ一九九九年に市道拡幅に伴う発掘調査を行ったところ、新たに墨書土器四が多数見つかり、中に「厨」が二点含まれていた。須録されたことから研究者



厨と墨書された器の点



て郡衙の可能性が非常に高いとみる。高田 中野教授を案内した同市教委社会教育課の佐藤正彦文化係長は「遺構は正しくはわからないが、古くは高線を見ても人工的な高線があったり、何らかの施設があった可能性はある。採金と海産物に恵まれた当地に

「気仙郡は国府勢力が在地の蝦夷酋長を郡司に当職に取り立てたわけである。エミシ郡だ」と思っているが、中野教授は「墨書土器の中には『言も多』が何ぞ意味するの。本格的に解説、検討する必要があります。併せて遺跡の発掘調査も望ましく」と意見を強調している。

以前に現地を訪れた中野宗法政大文学部教授と考えるのは自然との受け止め方だ。かつて「厨」土器が出た土の胆沢城跡を調査した例もあるがその場合、寺跡跡から出土した例もあるがその場合、調査センターの伊藤博幸副所長は「城柵官街では宴會儀礼のために厨房が必要で、宴席にはのり早くは分かった」といっている。

「厨」土器が出土した例もあるがその場合、調査センターの伊藤博幸副所長は「城柵官街では宴會儀礼のために厨房が必要で、宴席にはのり早くは分かった」といっている。

と考えている。すなわち、多くの人々の協力を得て、蝦夷関係の文献センターを目ざしたいと考えている。

(2) アイヌ史研究の試み

私は北方史という場合、当面蝦夷とアイヌとを念頭に置いているが、蝦夷、琉球・沖縄に比して、アイヌに関しては主体的に研究を進められる状態ではない。ただ、今まで少しばかりではあるが、取り組んできたので、それについてふれることとしたい。

昨年11月の末に、札幌で「海外アイヌ調査の現状」というタイトルでシンポジウムが持たれた。これは、海外にあるアイヌ関係資料調査の報告会といった性格を有していたが、海外におけるアイヌ関係コレクションの実態を知る上で良い機会であった。それとともにヨーゼフ・クライナー氏の、ヨーロッパでアイヌコレクションが盛んな理由の指摘も大変参考になった。国際シンポではアイヌに関する報告を佐々木利和氏にお願いするとともに、ニヅヒ出身のチュネル・タクサミ氏も参加していただき、日本における少数民族についてのご報告もいただいた。

又、一方で浦河地方アイヌ出身の浦川治造氏を知り、2月の第4回ワークショップにご参加いただいた。その際に、浦川治造氏を囲んだ会を催そうということとなり、それが6月に「アイヌの治造おおいに語る」というフォーラムとして実現した。その際に、また7月にコシャマイン慰霊祭が行われることを知り、7月5日にそれに参加し、多くのアイヌの方々と交流を持つことができ、アイヌに関する知識をより正しいものに近づけることができたように思う。今後とも、多くの人がアイヌについての正しい理解を得られるよう、機会を得たいと考えている。浦川治造氏のふるさと、浦河を訪れて、交流を深める話もち上がりつつある。

私は、この構想のはじめから、北方史を重視したいという意向を述べ、若干のアイヌ関係史資料も購入していたが、それらは、いずれもシサム（和人）側の資料である。そういったものの位置づけも、今後整理して行かねばならないと考えている。

また、この度、モスクワで開催された日ソ共同シンポジウムの帰途、サンク

トペテルブルクに立ち寄り、ロシア科学アカデミー東洋学研究所の支部を訪れ、アイヌ関係史料などを見せて頂いた⁽³⁾。時間が限られていたので、概観したにとどまったが、そういったものも、研究に取り入れられたらと考えている。

(3) 琉球・沖縄史の試み

先に、今での「日本」研究はあまりにも「ヤマト」中心、稲作中心であったのではないか、ということを書き、さらに沖縄の中世城郭（グスク）などめぐり、講義の中で写真などで現地を紹介しつつ講義に取り入れてきたこと、などを述べた。

北方史の重要性を感じ始めたころ、同時に中世琉球城郭（グスク）に関心をもち始めていた。しかし、それはたんに見学程度のものでしかなかったように、今にして思う。琉球史にのめり込んだのには、一つのきっかけがあった。北方史に深く関心を寄せるに至った動機に院生・学生の指導ということがあったが、琉球史に深く関心を寄せるに至ったことに関しても、論文審査ということが関わっている。

ただし、論文といっても学位（博士）論文であった。博士課程で指導していた大学院生と日ごろは『善隣国宝記』など「ヤマト」側の史料を読んでいたのであるが、審査論文で扱われていたのはほとんどが琉球ないし中国の史料である。それ以上に困ったのが、中世琉球史に関する知識の薄さである。これではいけないというので、審査論文を読みながら、琉球史関係の文献を読みあさった。ただ、今までの先行研究はその論文を審査するにはほとんど役に立たないということも判明し、あまり先行論文を探して読むということをしなくても良いということがわかって、論文審査は、その分だけ楽になったが、ともかく、中世琉球史の知識だけはしっかりと把握しなければならないので、短い間で、中世琉球史についての知識を習得した。そういったことを経て、あらためて沖縄を訪問すると、また今までとは、違った姿勢でものを見ているな、というのを切実に感じた。

(3) その他、ゴンザの辞書、ネフスキーのノートなども拝見した。

私の基本的姿勢は、「沖縄」（琉球）は明治になって「沖縄県」となるまでは日本ではなかった、という点にある。これは網野善彦氏と同じ立場であるが、昨年の国際シンポジウムでのヨーゼフ・クライナー氏のご発言とは異なっているようである。私はシンポジウムでの自分の「明治になって沖縄県になるまで、琉球は日本ではなかったと考える人間のひとりです」と述べた後、休憩時間に沖縄から来た方に、「あれでよいのですか」と伺ったところ、「よいのです」というご返事をいただき、ほっとした覚えがある。それはともかく、「異文化」研究の立場からすれば、琉球は「日本」なのか、今後とも考えてゆきたい。

昨年（2002年）の国際シンポジウムより以前から、今年（2003年）の4～5月に、「沖縄のアイデンティティ」といったテーマでシンポジウムを開こうという話が持ち上がっていた。これは清成忠男氏の企画したもので、それも本年5月に実現したわけである。残念ながら、私自身はシンポジウムには趣旨説明のみで、パネリストとしては参加できなかった。これは、私の琉球はいくらかわかるが、沖縄はわからない、という自己規定にもよるものであるが、このシンポジウムは大変勉強になった。というのも、準備の段階の打ち合わせ会でのパネリストの方々の討論をすべて聴くことができたからである。そこではシンポジウム本番では伺うことのできない「本音」を聴くことができた。

沖縄に関しては、ヨーゼフ・クライナー氏の企画により、来年3月に集中的なシンポジウム（ワークショップ形式）を開催する予定であるが、その際には、内在的に参加できるようにしたいと考えている。

（4）インターネット利用の試み

この構想には、成果の公開を、紙レベルのみでなく、CDあるいはWEBを通じて行うねらいも込められている。この間、それも試みてきたので、若干紹介しておく。

昨年の国際シンポジウムでは、ネット配信ということは試みなかったが、沖縄のサテライト教室へ大学院インスティテュートの講義を配信しようという将来構想もあるので、5月の沖縄サテライトシンポジウムを東京に配信しようという予定を立てていた。そして、その練習として5月の「小沢昭一おおいに語

る」を沖縄に配信する実験をしてみようということとなった。これは、東京（法政大学）と沖縄とをネットで結んで、双方向パネルディスカッションをしようというもので、具体的にはテレビ会議システムで行うこととした。他にリアルビデオの方法も考えられるが、それはどうしても時間差が生じるので、双方向会議には向かないであろうという判断であった。

沖縄大学との双方向配信は、一応実現はし、東京会場では好評であったものの、技術的にいえば、成功といえるものではなかった。それは、ひとえに沖縄大学のネットの帯域幅が狭い（1.5Mbps）ということであった。何かおきにかかる駒落ちは、許容範囲内に収まるものではなかった。この実験の反省から、6月の琉球新報でのサテライトシンポジウムは、光ファイバーを引いて行うこととなる。ただ、会場設定の仕方などの点では、実験は役立った。

ついで、6月の沖縄サテライトシンポジウム「沖縄のアイデンティティー新しい自治へ向けてー」では、前回の経験を活かしたものであった。シンポジウム会場には八の字型にパネリスト席を設置し、正面真ん中にスクリーンを置いて相手会場の模様などを投射する、というレイアウトは、前回の実験と同様であったが、パネリストを写す固定カメラを使い、そのカメラのそばにパネリスト用のモニターを置くといった点は、前回からの改良点である。カメラはシン



※写真提供・琉球新報社

ポジウム会場ではパネリストを写す固定カメラ2台と、正面後方からシンポジウム壇上全体を写すカメラ1台の、計3台を用いたが、東京会場・モニターにはスイッチで切り替えた映像を送って映すこととした。東京会場（大学院棟301教室）では、前後にある固定ドームカメラを用いた。このレイアウトは、基本的にはこの後も用いることになると思われる。

さて、8月の陸前高田におけるサテライトシンポジウムでは、光ファイバーを引くことができないので、8Mbpsに広げていただいたADSL回線を用いることとしたが、ADSLを用いることに対する不安は、本番で実際に体験した。また前回とはレイアウトの面で変更点がいくつかあった。

まず、前回までは、開催地と東京（法政大学）との2点を結ぶのみであったが、今回はドイツと結ぶことになった。ドイツから陸前高田側に直接接続してもらおうと、陸前高田側の帯域幅に不安があるので、ドイツと東京とを結んでもらうこととし、ドイツとの交信は東京経由で行うこととした。これのみでも不安があったが、沖縄大学が繋がりたいというので、つなぐことにしたが、結果的には、それがドイツ側に迷惑をかけてしまい、反省している。

その他の変更点としてはつぎのような点があげられる。シンポジウム会場には八の字型にパネリスト席を設置し、正面真ん中にスクリーンを置いて相手会場の模様などを投射すること、パネリストを写す固定カメラを使い、そのカメラのそばにパネリスト用のモニターを置くといった点は、前回と同様であったが、前回からの改良点として、もう一台、フロアを写すカメラを1台、前方下手の司会者席の横に付け加えた。したがって、カメラは、シンポジウム会場ではパネリストを写す固定カメラ2台、正面後方からシンポジウム壇上全体を写すカメラ1台、前方下手司会者席の横からフロアを写すカメラ1台、の計4台を用い、東京会場・モニターにはスイッチで切り替えた映像を送り映すこととした。また、会場が縦に長いので、会場後方の参加者のために、後方左右に補助モニターを2台置いて投影した。東京会場（大学院棟301教室）では、前後にある固定ドームカメラを用いた。

その他変更点としては、沖縄の際には、パワーポイントのみを用いたが、今回は、その必要性を感じたので、デジタルパネルを用いることとした。これは、パワーポイントのアニメーションの役目を果たすようなもので、モニター画面

にデジタルペンで書き込むと、書いたものがスクリーンに映し出されるという装置である。これは急遽採用することにし、パネリストの方々には、直前の打ち合わせで練習していただいたのみであったが、パネリストの方々もうまく使って下さり、好評であった。今後は、このデジタルパネルを採用する場面が多くなると思われる。

なお、会場の様子はすべてデジタルカメラ、デジタルビデオで撮影してあるので、いずれデジタルの形での配信を試みたい。

ところで、われわれのプロジェクトには、ネットワーク、リアルタイムというキーワードが掲げられている。その一つが以上で述べた、同時配信を伴ったサテライトシンポジウムであるが、じつは、その他にもいくつかの企画がある。それは、研究成果・資産の公開をCDあるいはWEBを通して行おうというものである。たとえば、昨2002年12月のシンポジウムの報告集ができたが、そのWEBでの公開、CDでの頒布なども予定している。それらは、現在準備中であるが、研究所のデジタル・ライブラリ・システムを利用してのデータベースの公開も予定しており、この成果集が刊行されるころには運用されているはずである。

まとめ

さて、「日本学」といった場合、網野善彦氏の研究を無視できないであろう。私自身の立場の基本は、網野氏の成果に立脚するものといえる。上記した足立原氏の活動の評価とともに、「網野氏の日本学」の全体像の評価はここでは省略させていただき、後日を期すこととするが、日本は一枚岩であるという理解への反省、なども、立脚点は多少異なるが網野氏が指摘していることである。また、本稿では詳細にはふれ得なかったが、稲作中心史観への反省も、網野氏のご指摘が基本的には正当なものであると考える。今後は、理念を唱えるだけでなく、稔りある成果を積み重ねて行きたい。

以上、雑ばくになったが、私の「国際日本学の構築」への心構えと取り組み、そして学んだこと、などを記させて頂いた。

それらを要約すれば、つぎのごとくになろう。

- 1 「国際日本学」構築の方法として「メタサイエンス」すなわち「学問の学問」という立場が有効であろう。それは、外国人が「日本」をどのようにして見ているかを研究することである。その場合、単にある特定の国の研究者の見方を日本人のみで分析するのではなく、第三者的立場の人を交えて評価することが必要である。
- 2 しかも、その場合、つぎのことも忘れてはならない。外国の人に正しい情報を提供し、正確な説明をなし得るように、われわれも外国人に正しい情報を提供し、また正しく説明できるよう、「日本」に関する研究を深めて行かねばならない、ということである。
- 3 「日本学」というとき、まず何よりも先に問題となるのが、「日本」とは何かという点である。「日本」を明確に定義することなしに、「日本学」を語ることは無謀であろう。
- 4 その場合、私は「日本」を所与のもの、単一なものとは見てはならないと考える。これは、今までの歴史観がヤマト中心、稲作中心すぎたことへの反省である。私は仮に「日本」をヤマト、蝦夷・アイヌ、琉球・沖縄に分けて考えたい。
- 5 総じていえば、「日本」研究を進める場合、単に複数の専門領域から対象にアプローチするのみでなく、しかとした概念規定あるいは方法論が必要である、ということである。

ここでは、以上のごときことを述べたが、これは、私の現在の考えであって、中間報告的なものである。さらに確とした「国際日本学」方法論構築をめざしたい。

『日本学』総目次

創刊1号(1983.5)

井上光貞・湯浅泰雄・山折哲雄
速水侑
池上洵一
中井真孝
千野香織
村井康彦
野崎守英・藤井貞和
紅野敏郎

吉田敦彦
岡井耀毅
湯浅泰雄

(特集) 平安朝の精神世界

日本学への招待(1)
浄土思想論-空也と源信(特集)
『今昔物語集』の精神世界-「思量り賢き」こと(特集)
神仏習合思想の形成と発展(特集)
日本の美・やまと絵の世界(特集)
王朝期の都鄙意識(特集)
平安朝文化の深層を読む(特集)
文学史の廻廊(1)-中村彝・会津八一・福田久道らの接点
「木星」
記紀の神話学(1)
韓国民譚のおちこち
井上光貞先生をしのぶ

創刊2号(1983.9)

井上光貞・湯浅泰雄・山折哲雄
石田尚豊
田中日佐夫
桜井好朗
平雅行
杉本圭三郎
岩崎武夫
水野正好
伊藤博之・大隅和雄
紅野敏郎

吉田敦彦
永畑恭典
永田正男

(特集) 中世文化への視座

日本学への招待(2)
洛中洛外図屏風成立をめぐって(特集)
生活文化の形成(特集)
中世の歴史叙述(特集)
旧仏教の中世的展開(特集)
「平家物語」のなかの中世(特集)
芸能民と説経の世界(特集)
中世-まじない世界の語りかけ(特集)
中世の読み方(特集)
文学史の廻廊(2)-稲垣達郎・古志太郎・三好十郎らの
「演劇」誌
記紀の神話学(2)
「東洋文庫」のなかの中国
ペンシルヴェニアでの日本文学

3号(1983.12)

尾藤正英・宮田登
小堀桂一郎
大石慎三郎
野口武彦
日野龍夫
佐藤昌介
辻本雅史

柏原祐泉
布川清司
松田修
金泰俊
宮栄二
井上勝生

(特集) 江戸期の思想・文化

近世思想の聖と俗(特集)
鎖国の世界史的意味(特集)
大開発の時代(特集)
地霊的なるものの重力-儒学思想の形成と変容(特集)
国学成立の基盤と展開(特集)
蘭学の思想(特集)
近世思想における統合論の系譜-幕末・近代教育史への
一視角(特集)
江戸期民衆と仏教の普及(特集)
農民の抵抗運動と知識人(特集)
都市と文学-三都を中心に(特集)
近世の旅と旅人-韓日における比較文化的考察(特集)
辺境の風土と文化-牧之・良寛の人間像(特集)
幕末の御前会議-伝統と近代(特集)

滝川勉
 櫛田克巳
 安田理夫
 紅野敏郎

吉田敦彦

フィリピンにおける東畑精一先生
 日本のなかのマルクス
 「レグルス文庫」のなかのインド
 文学史の廻廊(3)－女性雑誌の二つの姿－「女性改造」
 と「婦人サロン」
 と紀の神話学(3)

4号(1984.4)

紅野敏郎・嶋岡晨
 飛鳥井雅道
 竹内良知
 宮村治雄
 鈴木範久
 小沢浩
 長谷川洋三
 山下紘一郎
 今野寿美
 匠秀夫
 山口廣
 安川寿之輔
 川上市郎
 鈴木史楼
 免取慎一郎
 吉田敦彦
 A・パルマ

(特集) 明治の精神誌
 近代と反近代(特集)
 壮士・志士仁人・主義者－幸徳秋水の精神誌(特集)
 大西祝と西田幾多郎－近代哲学の起点(特集)
 中江兆民と「ルソー批判」(特集)
 キリスト者の夢みた独立国－内村鑑三の思想(特集)
 ナショナリズムと民衆宗教(特集)
 漱石における禪と良寛－近代知識人の限界と苦悩(特集)
 柳田民俗学の原初－日本の近代化に対する方法的懐疑(特集)
 「をみな」の詩精神－登美子と晶子に於ける「景」(特集)
 和洋相剋の美術－岡倉天心と朦朧画(特集)
 建築家の誕生－棟梁から建築家へ(特集)
 「帝国大学校令」の光と闇(特集)
 「大漢和辞典」をめぐる
 宮本竹逕と現代の書
 ギリシアの言語戦争
 記紀の神話学(4)
 合縁機縁－またはいかにして日本はわが身体を発見せしめたか

5号(1984.10)

上山春平・山折哲雄・湯浅泰雄

河合隼雄
 大橋一章
 菅原昭英
 寺川俊昭
 中村生雄
 野崎守英
 中尾堯
 子安宣邦
 丸山孝一
 久木幸男
 戸川安章
 山下欣一

(特集) 宗教世界の深層
 仏教思想と日本人－空海・最澄・法然・親鸞・道元などを
 めぐる(特集)
 昔話の中の他界(特集)
 斑鳩の宗教美術(特集)
 夢を信じた世界－九条兼実とその周囲(特集)
 念仏－化生の構造(特集)
 踊り念仏の身心論－古代から中世へ(特集)
 道元における自己の意味するもの－視法のユートピア(特集)
 日蓮宗不受不施派と地下(特集)
 有鬼と無鬼－鬼神と祖徠のアーキオロジー(特集)
 殉教から土着へ－キリシタンからカトリックへ(特集)
 富士講と弥勒信仰(特集)
 出羽の修験道(特集)
 南島の女性シャーマン－深層への回帰と再生(奄美の事
 例から)(特集)
 宮沢賢治の想像力と他界
 社会史研究の動向
 知の航跡－エリオットとホワイトヘッド
 青木香流の書像

黒住真
 藤原清貴
 高橋邦彦
 鈴木史楼

吉沢伝三郎
大里巖

晩年の和辻哲郎—その一端
現代における神の場

6号(1985.6)

西嶋定生・青木和夫・吉田孝
和田萃
森浩一
湯浅泰雄
鈴木英夫
八木充
野村忠夫
石上英一
林史典
蔵中進
西宮一民
稲岡耕二
遠藤宏
新沼杏二
鈴木史樑
吉沢伝三郎
紅野敏郎
太田修

(特集) 倭国から日本へ
東アジアのなかの古代日本(特集)
夕占と道饗祭—チマタにおけるマツリと祭祀(特集)
古墳文化の背景(特集)
聖徳太子の信仰(特集)
倭国の統合と朝鮮(特集)
国家の成立と地方支配(特集)
豪族から貴族へ—律令貴族官人の形成(特集)
日本律令法研究における“法と経済”序論(特集)
漢字の伝来と日本語(特集)
漢詩文と日本人—極初期日本漢詩の特質(特集)
記紀の文学的特質(特集)
人麻呂とその前後—記載文学としての表現の変化(特集)
地方和歌としての防人歌(特集)
「半人半馬王」
宮川翠雨の書—無法への階梯
敗戦前後の田辺元—その一端
文学史の廻廊(4)「戦闘文芸」の位置「文芸戦線」と「文芸時代」への挑戦
芸能民及び河原乞食考

7号(1986.6)

金関寿夫・大岡信
安本美典
沖森卓也
徳川宗賢
鈴木史樑
神田典城
藤井貞和
水野正好
杉山二郎
西山邦彦
野崎守英
杉本圭三郎
伊藤博之
萩原恭男
鈴木淳
郡司正勝
嶋岡晨
久野昭
小堀桂一郎
池上正治
相馬文字

(特集) 日本語の文化誌
内と外からみた日本語の世界(特集)
日本語の起源—新しい方法による探究(特集)
日本語の史的形成(特集)
日本語をめぐる中心と周縁(特集)
日本人の書—先進の発見と創造との往還(特集)
神話の中の日本語(特集)
『源氏物語』の言葉(特集)
呪の文学誌—呪句・呪文・呪歌への照射(特集)
和讃—口承のエネルギー(特集)
親鸞という名のりについて(特集)
道元の中の日本語(特集)
『平家物語』の叙事的表現—語りとの関連において(特集)
隠遁者と随筆文—徒然草をめぐる(特集)
『おくのほそ道』の創造したもの(特集)
荻生徂徠における詩と講釈(特集)
かぶきの口上(特集)
志士の詩(特集)
日本の哲学用語(特集)
鷗外の譯業と近代日本(特集)
日本に注がれる中国の“眼”
『文明東漸史』に触れて

美谷克己
星川清香
吉沢伝三郎

日常生活の冒険
ミュークナイ
和辻哲郎の仏教哲学研究-「自然的立場」の問題性

8号 (1987.2)

大林太良・吉田敦彦
益田勝実
中本正智
金井清一
脇本平也
宮家準
上井久義
佐々木宏幹
住谷一彦
小松和彦
平野雅章
田中日佐夫
小島美子
小野正文
八賀晋
大塚初重
斎藤学
金平允
一泉知永
中野昭二
近藤敬四郎
ふげしとちお
久野昭
西山邦彦
子安宣邦

(特集) 仏教以前の文化構造
世界像の構造と新解釈 (特集)
幻視の想像力 (特集)
日本語の形成 (特集)
文字以前の文学 (特集)
仏教前後の宗教状況 (特集)
吉野の山川と神社-水の神と金の神 (特集)
斎王と竹取-古代女性司祭の側面 (特集)
シャーマニズム-聖なる狂気の意味について (特集)
Das Japantum-日本の神と人と (特集)
山の民の宗教-いざなぎ流「釈迦・こうていの祭文」 (特集)
風土に培われた食文化-稗食の重要性 (特集)
仏教伝来の前と後-造形作品における美術史的考察 (特集)
仏教以前に歌い奏でられた音 (特集)
土偶-釈迦遺跡群から (特に製作法を中心として) (特集)
弥生期の農耕技術 (特集)
東国の水田遺構 (特集)
酒毒汚染の文明-市民的超克への回廊
或る韓国人と日本語
古代性別分業としての女性労働
私のなかに蝶が棲む
宮 栄二先生を偲ぶ
敗者の平和幻想
漱石の書とエトース-『精選・夏目漱石の書』にふれて
聖徳太子と親鸞-女犯と本願
「鬼神論」注解-近世鬼神論の序章として

9号 (1987.6)

杉山二郎・山折哲雄・湯浅泰雄
河合隼雄
頼富本宏
武光誠
岩城隆利
中井真孝
田村晃祐
松長有慶
石田慶和
渡辺宝陽
西垣晴次
鈴木史楼
内藤正敏

(特集) 宗教の知と信と儀
アジア的パラダイムと日本の宗教 (特集)
魂の知と信 (特集)
マンダラの図像世界 (特集)
斑鳩宮の仏教と社会 (特集)
「元興寺史料」のなかの仏教 (特集)
行基の伝道と社会事業 (特集)
山家学生式と天台 (特集)
真理の伝達-密教相承の形式と方法を中心として (特集)
法然と親鸞-その臨終行儀をめぐって (特集)
日蓮の宗教における智と信 (特集)
橋・境界・橋占 (特集)
書の世界-墨跡・良寛・空海 (特集)
耳無不動伝説に隠された江戸のトポロジー (特集)

門脇佳吉	創作能「イエズスの洗礼」によるミサ (特集)
鈴木範久	陽明学的キリスト教 (特集)
藤井正雄	新宗教の法座 (特集)
茨木竹二	雛人形と雛祭りの伝統 (特集)
目崎徳衛	良寛のゆたかさ
松澤謙	山の道
原口庄輔	高度シナジー社会
春木五郎	信濃川船溜り(蒸気場)
萩野貞樹	アミノナカヌシは造作神か-「借入の説」の一側面
福寛美	『おもろさうし』の“ネ”と日本神話の“根”

10号 (1987.12)

網野善彦・杉本圭三郎・大隅和雄
 北川忠彦
 安良岡康作
 島津忠夫
 中本環
 桜井好朗
 高橋富雄
 横井成行
 笹川祥生
 上田純一
 神田千里
 武田鏡村
 池見澄隆
 高木豊
 石川力山
 平野雅章
 湯浅泰雄
 岡井耀毅
 佐藤敬治
 高橋裕一
 松本市壽
 小野泰博
 定方昭夫

(特集) 中世像のパラダイム

中世研究の現在 (特集)
 能の誕生 (特集)
 五山文学-理をめぐって (特集)
 『筑紫道記』の問題点-宗祇の旅 (特集)
 狂風の果て-一体宗純論 (特集)
 中世の神話と芸能 (特集)
 平泉文化-北のロマン (特集)
 中世瀬戸内の熊野先達 (特集)
 軍記のなかの地方 (特集)
 武士と禅宗-九州地方を例として (特集)
 真宗門徒の戦国時代-一向一揆論序説 (特集)
 善光寺信仰と親鸞-中世の念仏聖と“悪人” (特集)
 臨終念仏考-聞く・聞かせる (特集)
 日蓮における〈娑婆〉の理念と現実 (特集)
 禅の葬送 (特集)
 行としての典座-道元禅と「食法一如」 (特集)
 北京漫歩 = 氣功師と文化大革命
 韓国の郷党意識
 野口雨情追想
 飛驒の国に獅子を求めて
 良寛が提起したもの
 メタファー的思考と宗教
 「虫」の正体を探る-ユング・道教・易

11号 (1988.7)

源了圓・テツオ・ナジタ・子安宣邦
 布川清司
 毛利敏彦
 芳賀登
 宮城公子
 松浦玲
 大口勇次郎
 荻生茂博

(特集) 幕末=近代化の葛藤

和魂洋才の深層-儒教的知と近代化 (特集)
 京都町人の政治意識 (特集)
 薩摩藩と琉球王国 (特集)
 草莽の国学 (特集)
 山田方谷の陽明学 (特集)
 佐久間象山と横井小楠 (特集)
 勝海舟の二つの「夢」 (特集)
 異学の禁から幕末陽明学へ-「自得」、知の在り方をめぐって (特集)

飯田鼎
犬塚孝明
神保五彌
神山彰
櫻井進
久野昭
五所英徳
長谷川龍生
岡井耀毅
池上正治
福田晃
古川のり子
茨木竹二

12号(1988.11)

梅原猛・久野昭・古東哲明
吉田敦彦
大林木太良
柳富子
勝部真長
嶋岡晨
黒住真
野崎守英
大沢正道
鈴木範久
W・R・ラフルーア
湯浅泰雄
竹内良知
安東璋二
金成陽一
錢本健二
入江春行
中井義幸
上垣外憲一
中島国彦

神谷忠孝
野島秀勝
永田正男
ふげしとちお
鈴木史楼
荒井房子
浅田雅直
米田達也

福沢諭吉の西欧体験(特集)
ロンドンで会った薩長の若者たち-幕末留学生断章(特集)
街談巷説の文学世界-一九・三馬・春水など(特集)
黙阿弥・「七五調」の命運(特集)
「自己」への誘惑-実情歌論における自己特権化について(特集)
凧と電信
わが幕末閑話
釈読の方向に
日韓こころ異相
中国語によるジャパノロジー
中世縁起と唱導-安居院作『神道集』をめぐって
アマテラスの神話と神功皇后伝説-その構造的対応関係
「流し雛」と「雛流し」の象徴的意義

(特集)日本回帰=近代への逆説

国際化の中の日本と日本の中の世界(特集)
神話学から見た日本の特質(特集)
人類学からみた日本-第二次文明の一つとして(特集)
ロシア人の日本論-その一側面(特集)
R・N・ベラーの日本論(特集)
菅原道真と遣唐使の廃止(特集)
儒教の日本化をめぐって(特集)
宣長の粗雑さと卓抜さをめぐって(特集)
石川三四郎の東洋回帰(特集)
亡国の預言者・内村鑑三の日本(特集)
廃墟に立つ理性=和辻哲郎(特集)
ポスト・モダンの時代と和辻哲郎(特集)
三木清のマルクス理解の遺産(特集)
亀井勝一郎の遍歴相(特集)
カフカ、そして「浦島太郎」をめぐって(特集)
小泉八雲と海の宗教(特集)
与謝野晶子-「女」の封建と近代(特集)
森鷗外とカルマジノフ『該撤』をめぐって(特集)
漱石にとっての伝統(特集)
Un di felice 「嬉しき其日」-オペラ体験から見た荷風の心的構造(特集)
日本ロマン派論-保田與重郎を中心に(特集)
三島由紀夫の「日本回帰」、この悲劇的なるもの(特集)
北京明暗
『山口哲夫全詩集』と飲み死
日比野光鳳の仮名
井の頭公園の秋
近世後期国学者と民俗信仰-平田篤胤の「幽冥」の位置(上)
縁起の受肉化-空海における「身」について

13号(1989.5)

大林太良・吉田敦彦・松村一男
塚本学
山折哲雄
松前健
林道義
大島建彦
古川のり子
T・カーン
上垣外憲一
浅見和彦
稲田浩二
野村純一
丸山顯徳
武田正
岩瀬博
山下紘一郎
吉沢伝三郎
成清良孝
瀬戸豊彦
國兼正章
ふげしとちお
湯浅泰雄
池田温
森雅子
浅田雅直

(特集) 神話・説話・民話の宇宙

天皇制の神話学(特集)
華夷感覚からの解放(特集)
カオスとコスモス(特集)
日本神話論(特集)
日本神話の英雄とトリックスター(特集)
やまとことばとその周辺(特集)
異類女房譚の神話学(特集)
狂言における祝言性-インデックス解読を通じて(特集)
河のほとりの女-謡曲「檜垣」の神話的読み(特集)
翁の族類たち-東大寺供養説話より(特集)
「鶴女房」の源流(特集)
炬端のストーリーテラー-早物語の担い手(特集)
沖縄の民話と他界観(特集)
昔話と呪文(特集)
贅女の語る世界-『杉本キクエ唄昔話集』から(特集)
柳田国男の皇室観(特集)
敗戦直前の或る倫理学者の動静
適切さを欠く教材や入試問題
老樹のドクター
坂口安吾-ぶらつき抄
雪国のフォト信像-平賀治雄『越佐・古寺名刹』
“哲学”が終る時代の知
敦煌学と日本人
ギルガメシュの末裔-中国と古代オリエント
近世後期国学者と民俗信仰-平田篤胤の「幽冥」の位置(下)

14号(1989.12)

山口廣・田中日佐夫・杉山二郎
三谷博
井上勲
松尾正人
井川克彦

西成田豊
飯田鼎
小西豊治

嶋岡晨

久野昭
望田幸男
鈴木範久
片岡啓治

(特集) 脱亜入欧の光と影

近代日本文明の重層構造(特集)
積極開国論者の世界像-古賀 庵『海防臆測』(特集)
印象・文明開化(特集)
廃藩置県断行と鹿児島(特集)
日本蚕糸業における輸出税廃止問題についての覚書-
「脱亜入欧」の経済史的側面(特集)
官営鉄道の「労働世界」(特集)
福沢諭吉の合理思想(特集)
自由民権と天皇制-小田為綱文書「憲法草稿評林」を
めぐって(特集)
土佐商会から財閥三菱へ-詩人的郷土から海商となった
岩崎弥太郎の軌跡(特集)
明治期における「哲学」の形成(特集)
プロイセン・ドイツは近代日本のモデルか(特集)
信教の自由とキリスト教-日本人は寛容か(特集)
尊王論再考-受動性の構造(特集)

- 中井義幸 「鷗外の洋行」についての資料-滞欧中の鷗外に宛てた家族の書簡(特集)
- 中島国彦 シカゴの闇、ワシントンの燈火-『あめりか物語』に見る荷風の表現構造(特集)
- 佐藤敬治 添田唾蟬坊と小樽の夜
- ふげしとちお 「黒い眼帯の女」考現学-テント芝居に拾う
- 吉田陽 もっと知って欲しい中国-国際化の内なる日本へ
- 荒井房子 武蔵野の秋祭
- 古志七郎 シンクレティック・ニッポン
- 中村政則 モチと天皇制
- 小澤俊夫 昔話の比較研究の可能性
- 倉沢幸久 『神皇正統記』の思想の根本-「一気一心」からの考察
- 中哲裕 絵解き『源氏物語』-浮舟物語と「二河白道図」
- 15号(1990.6)**
- 渡辺和靖・佐藤康邦・竹内整一 (特集)大正モダン・デモクラシー
- 岩井忠熊 大正文化と「個」(特集)
- 山田洸 大正期の天皇制(特集)
- 季武嘉也 大正デモクラシーの思想と運動(特集)
- 柴崎力栄 「大正デモクラシー」と「積極主義」「均霽主義」(特集)
- 山本義彦 地方行幸啓における皇太子嘉仁親王の登場(特集)
- 塩崎弘明 ヴェルサイユ体制・ワシントン会議と日本の「大国」化-その陥穽(特集)
- 太田哲男 軍部の革新-「赤い将校」の系譜と思想(特集)
- 山下紘一郎 南方熊楠と「自然」・「地域」(特集)
- 助川徳是 柳田国男と天皇機関説(特集)
- 有山輝雄 大正教養派の位相(特集)
- 清水孝純 大正デモクラシー期の新聞と言論の自由(特集)
- 倉智恒夫 ロダンの衝撃についてのエスキス-大正期文学的コスモポリタニズムの一面(特集)
- 菊地弘 芥川龍之介における仮構の造形から崩壊まで(特集)
- 山敷和男 芥川龍之介の歴史小説(特集)
- 板垣哲夫 デコラティブな憂鬱=佐藤春夫(特集)
- 小西豊治 石川三四郎「虚無的日本人」(大正10年4月)について(特集)
- 松澤譲 石川啄木と北一輝(上)(特集)
- 子田重次 J・F・エンブリーが書いた村・須恵
- 「日本学」編集室 御風景仰の人=井伊各量さんを偲ぶ
- 中哲裕 野村四郎「三輪」能から
- 越野真理子 『源氏物語』の広報観について-同態における広報をめぐる神武東征とアマテラス神話の類似
- 16号(1990.11)**
- 奥平康弘・山極晃・中村政則 (特集)戦後昭和誌
- 山田洸 象徴天皇制-国際的構想とナショナル・アイデンティティー(特集)
- 神田文人 戦争責任と主体性論(特集)
- 渡辺久丸 戦後日本と社会主義政党(特集)
- 「大嘗祭=公的行事化」合憲論と日本国憲法(特集)

- 高橋史朗 日本占領政策と教育改革(特集)
 安孫子麟 農地改革の功罪(特集)
 内山秀夫 〈戦後体験〉のパースペクティブ(特集)
 北林才知 放送から見た戦後社会史点描(特集)
 三浦陽一 冷戦構造と日本-占領下の日本共産党の非合法化問題をめぐって(特集)
- 岡井耀毅 昭和写真とオプティズム(特集)
 長浜功 教育学者の思想と行動-戦時下と戦後の位相(特集)
 川津誠 「ヒロシマ」の痛み(特集)
 日高昭二 六〇年安保と文学(特集)
 平岡敏夫 戦後文学のなかの自我と民族-竹内好・中野重治・福田恆存(特集)
- 立石伯 アヴェンギャルドの精神-埴谷雄高と花田清輝の光芒(特集)
 佐藤秀明 廃墟の時代から-三島由紀夫の「絶対者」瞥見(特集)
 浅子逸男 戯作者の誕生-坂口安吾、戦後から戦中へさかのぼって(特集)
 桑名靖治 文章のなかの戦後風景(特集)
 伊豆利彦 戦後民主主義文学運動の出発点-『播州平野』と「歌声よ、おこれ」(特集)
- 森英一 肉体文学・ポジとネガ(特集)
 池田純彦 戦争体験の文学-大岡昇平-『野火』小論-「菊」と「銃」(特集)
- 野坂幸弘 戦後社会史としての裁判-《チャタレイ事件》(特集)
 中島国彦 荷風・白鳥・寺田透-敗戦という現実を受けとめる精神のかたち(特集)
- 鈴木史楼 會津八一と良寛の書
 中野昭二 タイ国メーホンソンの鎮魂碑
 ローズメリー・モリソン 内なる他者-和辻哲郎の「人間」およびポストモダン時代における主体

17号(1991.5)

- 林玲子・吉田伸之・竹内誠 (特集)元禄・都市の文化誌
 笹本正治 元禄再考-元禄文化を可能にしたもの(特集)
 深谷克己 永続する家意識の確立-判子・墓・系図(特集)
 荃田佳寿子 義民像の源流(特集)
 塚本学 法が捉えた元禄(特集)
 佐藤常雄 綱吉と吉宗-生類憐れみ政策から小石川養生所へ(特集)
 杉田善雄 農書にみる元禄文化-近世農民の生活誌(特集)
 小暮正利 勸進の変容-東大寺大仏殿再興をめぐって(特集)
 野々村勝英 元禄地方直し(特集)
 野崎守英 仁斎と古義堂サークル(特集)
 村井紀 『葉隠』管見(特集)
 森下みさ子 契沖の「古代」(特集)
 佐藤泰子 さらされる身体-からくりにおける「子ども」(特集)
 高尾一彦 元禄の華-町人の装い(特集)
 音の文化-元禄の流行歌をめぐり(特集)

杉本つとむ

元禄の吉原、話しの風景-Yosiwara is a strange mixture of open sex and silent-frustration (特集)

河野元昭

宗達から光琳への変質 (特集)

浅野晃

西鶴文学の基盤-元禄前夜の文学状況 (特集)

谷脇理史

西鶴の世界に生きる女たち-『好色五人女』の一面 (特集)

鳥居明雄

近松・劇性の転換-「封印切」以後の『冥途の飛脚』 (特集)

萩原恭男

捨身無常の観念-芭蕉の旅の性格 (特集)

佐藤敬治

雨情点描・幸徳秋水との別れ

大星光史

相馬御風『良寛和尚詩歌集』に就いて

「日本学」編集部

青山杉雨『文字性霊』に触れて

吉川修

土方巽と言葉

「日本学」編集部

追悼・近藤敬四郎と良寛界

古川のり子

昔話の思考

18号 (1991.11)

(特集) 律令制と官僚制

吉田孝・尾藤正英・猪口孝

日本の官僚制 (特集)

吉田敦彦

カオスからコスモスへ-神話に物語られた三機能的支配システムの成立過程 (特集)

加藤謙吉

大和政権の職務分掌組織と官制整備の実態 (特集)

武田佐知子

冠位から位階へ-古代官僚制の形成と冠位制 (特集)

菊池克美

初期式部省史論 (特集)

曾我良成

王朝国家実務官人と局務家・官務家 (特集)

今谷明

戦国大名と律令官位 (特集)

深谷克己

幕藩体制の官僚制的特質 (特集)

森瑞枝

「国学四大人」と律令研究 (特集)

久野昭

近代官僚制の安定化 (特集)

下野雅昭

近代国家の形成と「標準語」 (特集)

秦郁彦

戦前期日本の文武官僚さまざま (特集)

倉田卓次

裁判官の公と私 (特集)

佐藤敬治

野口雨情誕生の前夜

高橋義人

日本人とトーマス・マン-エピソード風に

浅見公一

陰画の都市-写真の虚構-ユジェヌ・アジェとパリ

福寛美

セザの三機能

中哲裕

紫式部と源信

長谷川洋三

相馬御風の『還元録』と良寛研究-御風が遺した根元的意義と今後の課題

狩野敏次

床(ゆか)と身体のコミュニケーション-坐としぐさの日本文化

湯浅泰雄

明治維新の歴史心理学-比較思想的に考える

19号 (1992.5)

(特集) 中国趣味の系譜

大岡信・芳賀徹

エキゾチズムの詩学 (特集)

辰巳正明

万葉集の季節感と中国趣味 (特集)

清水章雄

万葉集の憧憬-菊・万葉にない花 (特集)

波戸岡旭

空海の詩文と宮廷漢詩 (特集)

井口樹生

花のエキゾチズム (特集)

鎌田茂雄	秘められた日中文化交流-中国において碑文を撰書した日本僧(特集)
今谷明	足利義満の中国崇拜(特集)
重田みち	能に於ける中国-出立を中心とした(特集)
衛藤駿	雪舟の筆受-中国水墨画の日本土着化(特集)
野崎守英	『大和小学』読解-山崎闇齋における中国と日本(特集)
高島俊男	文山は白話を訳したのか-『通俗三国志』について(特集)
大庭脩	明末清初に來航した中国人(特集)
鈴木充	江戸時代の日中技術交流-赤穂義士武林唯七をめぐる(特集)
上野洋三	芭蕉・黄檗・みなし栗(特集)
鈴木健一	『唐詩選』の日本的受容-千種有功の『和漢草』を通して(特集)
池澤一郎	大田南畝聯句小見-南畝から荷風へ(特集)
高橋博巳	田能村竹田の中国趣味(特集)
藤原恵洋	上海 彼岸都市のトポロジー(特集)
春名徹	〈魔都〉に着いてから(特集)
入谷仙介	証言としての漢詩-鈴木豹軒と戦争(特集)
池上正治	「気」の日本的受容-日本語のなかの「気」(特集)
阿辻哲次	漢字のベクトル-漢字の構造理解に関する一つの可能性(特集)
高山宏	チャイナ・リフレクション-シノワズリーの東と西(特集)
高橋義人	日本人とトーマス・マン-8月15日における渡辺一夫氏の場合
国吉由一	情緒としての震災
佐藤敬治	雨情樺太行への考察(1)
諸橋宏敏	戸田提山展を観て
浅湯泰雄	政治的ロマン主義とナショナリズム-明治維新の歴史心理学②

20号(1992.12)

山口昌男・太田省吾	(特集)身体と歴史
市川浩	〈生きられる身体〉へ(特集)
久米博	〈身〉の疎外、または化外(特集)
小川恵	癒しの言葉とその構造(特集)
佐藤憲昭	精神医学と憑依(特集)
吉岡郁夫	シャーマンと寺院との関係をめぐって(特集)
中村生雄	日本のカニバリズム(特集)
森田律水	〈苦しむ神〉の身体論(特集)
本田和子	鬼の形象が意味するもの(特集)
森下みさ子	母子乱菊の譜-成就される「身」、引き裂かれる「身」(特集)
今尾哲也	細工としての身体-江戸に見る姿態図から(特集)
ひろたまさき	死に至るお岩-南北における変身の仕掛け(特集)
川村邦光	民衆における心身-明治期の学校を中心に(特集)
村井紀	ハイヒールを履く女-女の身体の近代、をめぐる断章(特集)
櫻井進	『死者の書』について(特集)
堀内守	歩行・漂泊・巡礼-歴史的想像力の諸様式について(特集)
宮尾慈良	手わざと教育(特集)
狩野敏次	舞踊のアーケオロジー(特集)
	住居空間の心身論-「奥」の日本文化(特集)

湯浅泰雄
高橋義人
佐藤敬治
吉沢伝三郎
中野昭二
宮津博
諸橋宏敞
浅見公一
国吉由一
三田徳明
倉沢幸久
張紀濤

気と人体科学(特集)
日本人とリルケ-堀辰雄・多恵子夫妻のこと
雨情権太行への考察(2)
和辻哲郎の面目-津田左右吉博士事件公判における証言
四国遍路
のんのんずいずい話
小暮青風先生の人と書
「田紳有楽」から/まで
情緒としての震災(2)
『古事記』神話と言霊信仰
十二巻本『正法眼蔵』再考
改革を要する中国の幹部人事制度-官本位制度と政治
改革の関連を中心に